

サルバドール・ダリ作『焼いたベーコンのある柔らかい自画像』の鑑賞 —中学1年生が青年期の『自画像』を参考作品とした場合—

立原慶一

『焼いたベーコンのある柔らかい自画像』（1941年、油彩、61×51cm、フィゲラス、ガラ・サルバドール・ダリ財団蔵）は鑑賞者に好まれないのがいつわらざる事実であり、すばらしいと感激する生徒はあり得ないものと思われる。主題はおおかたの予想通りに感受されることになるので、本絵をあえて取り上げ実践研究しよう一念発起するなど、鑑賞教育論的な興味・関心は一切わくことはない。しかし本研究はそうした一般常識を突き崩して、好悪感情を度外視する方向から鑑賞教育の可能性を切り拓こうとする。それによって本絵に独自の美的体験を彼らにもたらしることができよう。そこに題材設定の理由を見出したいと思う。

本題材では本絵を単独ではなく、ダリ青年期の『自画像』（1921年、パネルに油彩、47.5×31cm、フィゲラス、ガラ・サルバドール・ダリ財団蔵）を参考として鑑賞させる。それは暗い色調に支配されているものの、ダリ作品では珍しく正の抒情を基調とする作品である。そのため参考作品は本絵鑑賞に「対抗抒情」をもたらすのである。それは参考作品との対比意識を前提として、鑑賞体験の新たな次元に現れ出る。それと共に、形や色など造形要素を基に誰にとっても等しくイメージしうる、正的な抒情に変貌している。青年期の自画像における造形的特徴を踏まえて、生徒は改めて感性的把握に立ち向かうのである。

宮城教育大学附属中学校1年生3クラス109名（ワークシート提出者）に比較鑑賞させることによって、本絵の見方に対する一方的な拒絶感を打ち消し、鑑賞ではどのような中身のプラス抒情が主題として感受されたのか。またそれが人間形成的にいかように働いたのか、を探らうと思う。本題材はどのような条件のもとに機能すれば、より大きな教育的意義を発揮するのか。またいかなる条件下にあれば、それがぼやかされて霧散してしまうのか。その因果関係を究明したい。

本絵は一見して、「気持ち悪い」「薄気味悪い」という負の印象を与え、毛嫌いされるような作品であろう。それにも拘わらず、プラス抒情の参考作品を本題材実践に持ち込み、本絵に対する対抗抒情を体験させる。そうすれば生徒に価値感情的な葛藤を前提として、正の主題を把握させる可能性も生まれよう。

本題材で豊かな感情体験が生徒にもたらされたのは、授業の中間地点で青年期ダリの『自画像』を対比的に鑑賞させたことによる。彼らは、本絵に対する対抗抒情（プラス）としての美的特性を直観的に把握すると同時に、本絵と参考作品に対する美感を対比的な形で、豊かに味わったのである。

青年期の『自画像』を対比鑑賞したことによって、本絵に対する拒絶的なイメージが弱められ、参考作品と関連づけて正の物語を形づくった事態に、題材設定の意味が見出せた。もし単独で本絵を鑑賞したならば、これほど多く生き方論的テーマが感受され（66.1%）教育的意義が発揮されることは、期待できなかったはずである。

それ以外の生徒はフィードバック鑑賞を行っても、本絵は風変わりな絵として判断され、それからうらびれた主題を感受するに留まった。彼らには正の対抗抒情が生まれない分、正負の価値感情をめぐって葛藤が一切起こらなかった。生徒の内面において変容はなく、人格的な向上は認められなかったのである。その否定的な局面が露わとされたが、それは筆者にとって実践的反省の切っ掛けとなり、鑑賞教育のあり方をめぐって行われるべき理論的考察を動機づけた。

本題材では心がかき乱される分、価値感情的な葛藤をめぐって力学（ダイナミズム）は大きく作用する。それは学習指導要領美術編が標榜する、「心豊かな生き方」や「心豊かな生活」への導き糸に、つながる性格のものといえよう。本題材ではその論理を証明するかのように、心のふれあいによる生き方への共感的テーマが約7割の生徒によって感受され、彼らに人間形成的な意義をもたらすことができた。